

5・「このにくい集中豪雨め」

南信濃村遠山中学校二年 M・S

あのおそろしかった集中豪雨を思い浮かべると、ついこの間のように思える。集中豪雨は人々の生命をうばい、家を流し、田畑をうばいとっていつてしまった。雨はザンザンふり続き、おかげで道路なんか水びたしになってしまった。それどころかバスも通らず、自転車一台も通らない。滝の水はぐんぐん増し、遠山川は真っ黒いだけ流となって、水かさもぐんぐんふえていた。雲は少しも動かず、まだまだ雨はやみそうもなかった。かみなりはごろごろなるし、もう気がいらいらしてしまった。

「大町の堤防が切れた。」

という知らせが耳に入り、私はおどろいた。お昼頃友達と大町を見に行つた。石堂の下の所で見たら、私は思わず、

「ごくり」

とつばをのんだ。

田畑は流され、家は半分水がつき、見るもむざんな姿だった。私は、こんなにもなったかと思うと、大町の人達がかわいそうになった。下へおりて川のすぐそばでよく大町の方を見ていた。雨がふっているというのにみんなが真剣になって、大町のだく流にのまれた家々を見つめるだけだった。私は大町を見つめているうちに、

「このにくい、集中豪雨め」

と思つた。

みんな思い思いの言葉が出ないらしく、歯がガチガチ合わさっているように思えた。

田んぼなんかをいっしはっしになって、水を防いでいる人を見ると、私まで、手伝ってやりたいような気がしてくる。

「あぶないから。」

といって、大人の人が少しさがらせた。その場で一步も動かず、遠山川を見いってしまった。

おかずもろくろく店には売っていなかった。お菓子も一つもなくなってしまった。二、三日はおいしいおかずもお菓子がまんしなければならなかった。だが、お菓子やなんかがまんする位なら、まだまだ良い方だ。家が流れてしまった人達なんかこれ以上に悲しいだろうに。

(三十八年)